

“まちの担い手”を育む場づくり

認定 NPO 法人こまちぶらす 居場所づくりコーディネーター 大塚 朋子

◆はじめに

いまご紹介いただきました大塚です。私は大学で福祉を学んだあと、障害のある方の通所施設の相談員をしていました。その後、横浜市内の地域ケアプラザの地域活動交流コーディネーターや、社会福祉士として地域包括支援センターの相談員をしていました。NPO 法人こまちぶらすとは、いま 7 歳の娘が 1 歳のときに、子連れでランチができるお店があるとお友達に聞いて行ったのが始まりです。専業主婦をしている私は子連れでボランティアできる所を探していたのですが、「こまちカフェ」で幼稚園や子育てに関する口コミ情報紙を作るボランティアの募集案内を見て、関わらせていただきました。現在担当している居場所づくりコーディネーターの活動は 2017 年からになります。

◆こまちぶらすって何？

こまちぶらすは、横浜市にある JR 戸塚駅から徒歩 7、8 分の所で「こまちカフェ」を運営し、そこを拠点に活動しています。2012 年に設立した当初は、孤立した子育てのない社会を目指していました。2 年ほど前にスタッフ全員でビジョンを見直した時に、孤立がなくなるだけではなく、さらに子育てが豊かになることを目指して、現在は「子育てがこまちの力」で豊かになる社会」を掲げ活動をしています。そしてこのビジョンの実現をめざすために、「それぞれの人の力が生きる機会をつくる」を、私たちの役割（ミッション）にしています。このミッションは、これから具体的にご紹介する取り組みと深く関わってきます。

それから団体名の由来ですが、「子育てをまちでプラスに」というスローガンからつけています。有償ボランティアも含めて、スタッフという形で働いている人が大体 50 名、登録のボランティアさんは 160 名ほどになっています。

◆主な事業の特徴

こまちぶらすの活動は、子育ての孤立を防ぐためにまず居場所（カフェ）を作り、地域の活動の情報を届けることの二つから始まっています。こまちカフェは月曜日から土曜日の 10 時から 17 時までカフェとランチの営業を飲食店としてやっています。ランチタイムには見守りのボランティアさんがいます。お母さんに温かい料理を両手で食べてほしいということで、ちょっと抱っこしたりと、託児ではなく見守りをしています。

カフェの奥にはイベントができるスペースもありま



す。そこでは私たち主催の「おしゃべり会」等の企画をやっています。カフェに来てもらうだけではなく、そこでちょっと自分の気持ちを話し、他の人の声を聞く機会も大事だという思いで実施しています。例えば、お子さんの発達に不安がある方の会や子育てと介護のダブルケアの方の会、不登校や引きこもりのお子さんを持つ親の会といったイベント等も開催しています。

カフェ店内では、作家さんたちと契約して、手作り小物の雑貨を販売しています。様々な方のチャレンジの場にもなっていますし、ランチには行きづらいという方も、雑貨を見にカフェにいらっしゃるようなことから、つながりが生まれる機会になっています。また、イベントスペースは貸し出しもしています。これは重要な運営資金になっています。

◆子育てをまちの力で豊かにする

それから「ウェルカムベビープロジェクト」という活動を、ヤマト運輸さんと協働事業でやっています。いま戸塚区と鶴見区で、赤ちゃんが生まれた世帯に出産祝いを無料で届けています。出産祝いの中には、参加してくださる企業から提供された品が入っています。子育てや出産等をまち全体で祝福、応援できるようにすることを目指して活動しています。

また、70 店舗ぐらいが加入している戸塚宿ほのぼの商和会の事務局もやらせていただいています。地元の方たちとつながる機会はとても大事です。また、特に新生児の頃は赤ちゃんを連れて大きな荷物を持って外に出るのは大変ですが、買い物には行きますので身近な商店会が居心地がいい場所になったらいいなという思いもあります。

◆「つながりデザインプロジェクト」

出産・子育てを機に、多くの女性は急に社会とつながっていないような気持ちになってしまうことがあります。また、一般的に子育て中のお母さんたちは自己

肯定感が低くなると言われています。そうした中で、自分がちょっと誰かの役に立てることがある、社会とつながっていると思えるように、その人の強みを生かせる、活躍ができるようにということで、「つながりデザインプロジェクト」に取り組んでいます。その中からいくつかご紹介したいと思います。

こまちカフェには私を含めて 4 人のコーディネーターがいます。まず私たち自身が研修を受けて、コーディネーターになります。そして、活動の担い手が生まれる機会を、いろいろなイベントや仕組みをつくりながら進めきました。

お客様として来た方が、何か主体的な活動をするようになるまでには、段階を踏んだチャンスがあることが必要と考えています。それが【図 1】です。まずはカフェに来ていただく、イベント等の情報をキャッチして参加していただく。何度か足を運ぶうちに愛着が湧いてきて、知り合いができてくるのが次の段階です。愛着が湧いてくると、自分も何かここでできないかなあという気持ちが生まれて、役割を担うようになります。それから主体的に関わってくるという流れです。そして居場所の内外問わずに何かアクションを起こす方を“まちの担い手”と私たちは呼んでいます。

今日、既存の制度だけでは補えない地域の課題に対し、住民参加によるボランティアでカバーしようという動きがあります。そこではボランティアの必要性を理解してもらおうとか、問題意識のある方をどう見つけてくるかといったことに縛られてしまっているように見受けられます。ここは一度、人手不足や課題の共有を脇に置いて、ご本人が何をしたいかを大事にし、その結果として誰かの困ったに手が差し伸べられるようになったらいいと思っています。

◆担い手の育つ場の取り組み

こまちカフェに足を運んだ方が愛着を持ってくださって、「私にも何かここでできること、ありませんか」とお客様のほうから声をかけられたり、カフェのスタッフがこの人にもうちょっと関わってほしいなとお

誘いをすることもあります。そうした中で、私たちは月に 1 回、「パートナー（ボランティア）登録会」を開催しています。参加費は 500 円いただいています。まず 1 時間かけてこまちびらすの理念や活動を聞いていただき、後半の 1 時間に皆さん自身の話をさせていただいています。子どもの頃好きだったこと、得意なこと、苦手なこと、そして最後にこまちびらすで何をしたいか。「手伝ってください」というだけではなくて、この人がどんなことを求めているのか、知ることが大切だと思ってやっています。登録した後は、個別にお話しする機会を作り、その人の状況に合わせてお誘いしています。

せっかくパートナー登録していただいても、そのままになってしまうこともあります。実際 160 人のパートナーがいつも活動しているわけではなくて、離れていかれる方もいますし、登録したままの方もいます。登録会をはじめたときは、イベントのお手伝いやカフェでの見守り等をお願いしていたのですが、それだけだとフォローし切れなかった部分もありました。それで新しくはじめたのが「もくもくの会」です。黙々と作業をするイメージで名前を付けました。実際には女性がたくさん集まれば、お話ししながら手も動かすというような会です。大体 1、2 時間で終わるようなチラシを半分に折ったり、アンケートを入力したり、ワークショップで使うようなツールを切ったり、貼ったり。それでもお客さんとして来るのではなくて、役割があってカフェに来る機会があるのはとても大切だと感じていますし、皆さん楽しんでくださっています。登録したものの、何から始めたらいいかわからない方には、とてもちょうどいい機会になっています。基本的には開催時間を設定して呼びかけていますが、最近ではパートナーさんのほうから、ランチのついでに「何かもくもくする物、ありますか」と聞いてくれるようになりました。また、作業を通じて他の活動などを知ってもらえるような機会にもなっています。

パートナーさん同士の横のつながりも必要になってくると思っています、月に 1 回、研修会や交流会を開催しています。また年に 3 回「フューチャーセッション」をやっております。こまちカフェから一歩外に出て、いろいろな立場の方と対話をするワークショップです。現在は子育て、障害、介護等をテーマにやっています。自分の課題が自分だけのことでなくて社会の問題であると気づいたり、自分の声が誰かの大きな気付きになったりするような経験をする場になっています。

◆パートナーへのアンケートから見えること

以上のような参加の機会を私たちは意図的につくってきたのですが、パートナーさん側からしたらどうだったんだろうと、アンケー

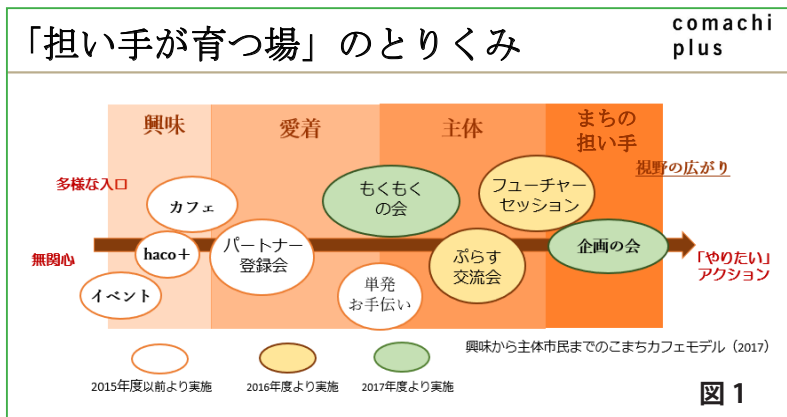


図 1

トとヒアリングで調べてみました。そこで見えてきたことを少しご紹介したいと思います。

パートナー登録をする時点で、やりたいことがある方は、「漠然とある」まで入れても約55%で、具体的なことがあった方は12%でした。多くの方が、登録した後に自分のやりたいこととか、できることを探していたことが見えてきました。

それから来店やイベント参加、パートナー登録など、こまちぶらすに関わったきっかけも見事にばらばらでした。図1のような左から右の流れ(ステップ)では必ずしもなく、行きつ戻りつするなど、細かいところでのいろいろなバリエーションがありました。一人ひとり関わり方が違うこと、それが自然なことだとあらためて教わりました。

もう一つ、見えてきたことですが、それぞれの機会に関わる「きっかけ」について調査したところ、「まちの担い手」に近づいていくところで、「パートナー仲間からの誘い」の力が大きいことがわかりました。関係が深くなるにつれて背中を押す人が増えているということです。スタッフからの誘いや意図的な流れだけではなく、横のつながりの中から自然にお互いの主体性が育まれていく。「やるなら手伝うよ」って言う仲間が増えていくことを確認できました。

アンケートのキーワードを整理すると、「恩返し」「居場所」「自分を認められる場所」のほかにも、「仲間が欲しい」「視野を広げたい」「地域とのつながりが欲しい」など、本当にいろいろな思いが寄せられていました。活動する動機についても、それぞれ違っていいんだと教わりました。

◆「まちの担い手」が育つ場に必要なこと

私たちは「登録会」や「もくもくの会」といったネーミングを付けて具体的な取り組みをしてきた4年間を振り返り、こまちぶらすが「まちの担い手」が育つ居場所であるため大事であった要素についてポイントを整理しました。その内容が【図2】です。

まず「入りやすい入口」があること。居心地のいい場所であるほど外から見ると、入りにくかったりしま

ず。人間関係が出来上がっている気がして。そこはあえて、常に入りやすいかどうか気を配る必要があります。入った先の「場の安心感」とか、「雰囲気づくり」。あとは横の「同士や仲間ができる機会」があるか、「役立ち感を得られる機会」があるかが重要な要素になります。

しかし、無理に図の右側にステップに進まなくてもいい。「足踏み」があったり、「学びの機会」があるだろうか。そうした中で自分の「やりたい」が「地域の困りごと」とか、誰かの声に結び付くか。その「やりたい」と思ったときに発信するチャンスがあるかどうか。不登校・引きこもりなどをテーマとしたイベントや映画上映会など、「やってみたい」と発信するチャンスがなければ、実現しなかったかもしれません。そういう場があるということも必要だと思っています。

◆居場所づくりコーディネーターの役割と課題

あと、こまちぶらすに、いらっしゃった人と人、人と機会をつなぐコーディネーターがいることも大きな特徴かと思っています。とはいえ、私たちもいろいろな難しさを実感しています。良かれと思って勧めた役割や出番が、本人には重荷だったり、逆に「もっとやりたいのに」という思いに、私たちが応えきれないということも正直あります。完璧にはできない部分だと自覚しながら、まだまだ模索しているところです。

こまちぶらすは相談や支援の場にはしていません。でも、いろいろな方が来てくださるなかで、ぼろっと大事なことを言って帰られたりすることがあります。ここはすごく大事にしたいところです。私たちは相談や支援の専門家としてカフェを運営しているわけではないので、私たちの対応には限界もあります。しかし、私たちが専門的な機関とつながっているとと思われると、かえって話して下さらなくなるかもしれないという葛藤もあります。ここはスタッフ同士が一人で抱えこまないように、相談しながらやっています。

こまちぶらすはご紹介してきたように、いろいろな取り組みをしています。パートナーさんと一緒に何かやっていくというのは、様々な活動のうちの一つです。

カフェにとっては、毎日新鮮でおいしいお料理を、安全に出すことが最優先ですし、事業性を保つためには売り上げも得ていかななくてはなりません。それぞれ優先することが違います。それでも、全体で大事にしたいことのバランスをスタッフ同士のコミュニケーションによって、常にお互いにいろいろ工夫しながらやっています。

(おおつか ともこ)

